二〇二四年度　入学試験問題　帰国生

国　語

【注　意】

・試験時間は五〇分です。（八時五〇分～九時四〇分）
・問題は一ページから九ページまでです。
・解答はすべて解答用紙に記入してください。
・字数制限のない問題について、一行分の解答らんに二行以上解答してはいけません。
・記号・句読点がある場合は字数に含（ふく）みます。
・解答用紙に受験番号、氏名を記入してください。

洗足学園中学校

1 次の文章は、牧野雅彦『今を生きる思想　ハンナ・アレント　全体主義という悪夢』（2022年）の第6章「『事実の真理』を守り抜く」の一節です。これを読んで、後の問いに答えなさい。

哲学や宗教の真理であれば、絶対的な真理、超越的な真理としての権威や神秘性を有している。そうした真理に進んで耳を傾けようとする者にとっては説得力を持つだろう。他方で、「自由」や「正義」といった原理原則や、「名誉」や「勇気」といった人間の持つ資質・特質は、超越性や絶対性という点では哲学や宗教の真理には劣るけれども、政治の世界で他人を説得する上では大いに有効性を発揮する。

これに対して、証人が語る「事実の真理」には、人を説得したり鼓舞したりできる内容はほとんど含まれていない。事実を語る証人は、それ自体としては何の変哲もないたんなる事実、哲学的・宗教的真理の超越性や政治的な原理や徳の崇高さを持たない「事実」を語らなければならない。

［　A　］複数の人間の行為の絡み合いの中から起こってくる出来事は、「一歩間違えれば違っていたはずの」事実、「普通ならおよそありえなかったような」事実であることのほうが多い。それが自分にとって都合の悪い事実であるならば、素直にそれを事実として受け容れられる者は少ないだろう。往々にして人は不都合な事実よりも、耳触りのいい虚偽の説明のほうを好む。(1)事実を語る証人は、かりにそれが時の権力者や一部の政治勢力、世間にとって都合の悪い事実であったとしても、事実をありのままに語らなければならない。どんなに不都合な事実、およそありそうにない事実であっても、実際に起こってしまった事実を、人々に伝えなければならない。だが、事実に目を塞ぎたがる人々、事実を語る人間に敵意さえ抱くような人々に対して、見たままの事実を伝えるのは難しい。たまたまその場にいあわせただけの目撃者なら、証言台に立って敵意や反感の的になるのは躊躇するだろう。

事件によって何らかの被害を被った者ならば、勇気をふるって証言するかもしれないが、その場合には、「証人は自分の利益から事実を歪めているのだ」と誹謗やアチュウショウを受けることになる。いずれにせよ、多くの者にとって「不都合な事実」を説得力をもって語ることは非常に困難である。かりに証人が他人に理解してもらえるようイネッベンをふるったとしても、それは政治的な説得の能力、彼の弁士としての能力を証明することにはなっても、彼が証言する事実の真理性、証人としての誠実さの証明にはならない。

不都合な事実を政治の場で否定するのは簡単である。ことさら証言の真実性、証人の誠実性を問題にしなくても、こう言えば足りる。「［　(2)　］」。かくして事実の有無についての問題は「見解の相違」という「意見」の問題に解消されてしまう。

a「事実の真理」を守り抜こうとする者は、「事実の真理」が政治の場で表明される「意見」とは根本的に異なるものであること、この点で哲学や宗教その他の「真理」と同様の性質を有していることを理解しておかなければならない。

「真理」には「意見」や「異論」の介入を許さない、有無を言わせない強制的なところがある。起こってしまった「事実」は一つであり、その原因や起こした者の責任、及ぼした影響や意味についての解釈は異なっても、前提となる「事実」は変わることはない。哲学や宗教、［　B　］科学の世界における「真理」も同様である。「真理」の発見の過程で論争があったとしても、正しい結論は一つでなければならない。明らかにされた「真理」はすべての人に等しく当てはまる。誰もそれから逃れることはできない。哲学などで数学的な推論が真理のモデルとされるのはここに理由があった。「真理」の有無を言わせないこうした性格は、複数の「意見」や立場の相違を前提とするb「政治」における討論とは根本的に対立している。

「真理」のこの絶対的な性格のために、政治の場において「真理」を語ろうとする者は、しばしばウセンセイ的な支配を弁護するものとして批判される一方で、本物のセンセイ支配者からは危険な存在として敵視されてきた。古代ギリシア・アテナイの民主政★ポリスによってソクラテスが死刑にされたときから、プラトンにはじまる哲学が根本的なところで政治に対して批判的・懐疑的な立場をとっていた理由も、絶対的な「真理」を求める哲学と、複数の「意見」の存在を前提とする「政治」との間の根本的な対立に基づいていたのである。

「事実の真理」が起こってしまった事実、一つしかない事実についての「真理」である限りにおいて、それは哲学や宗教その他の「真理」と同様の絶対的な性格を否応なく持っている。「真理」はそのようなものとして擁護されなければならない。そのためにはまず、「真理」と「政治」のそれぞれの領域をはっきりと区別することが必要である。

すなわち、「真理」の領域においては多数決による決定は通用しないし、多数決であれ何であれ、強制によって「真理」が抑圧されたり歪曲されたりすることなどあってはならない。

他方で、「政治」の場においては、何らかの「真理」を、人々が絶対的に従うべきものとして強制してはならない。「真理」が人々に求める服従は、あくまでも自発的な承認に基づくのであって、かりに多数の人々が認める「真理」であっても、それを権力や暴力によって強制することは、「真理」がみずから「真理」としての資格を放棄することを意味するからである。

[C]、「事実の真理」の担い手は、多数の人々の「意見」に依拠する「政治」の領域からは相対的に独立していなければならない。

政治的に中立の立場から「事実の真理」を擁護すべき存在として、まずわれわれの念頭に浮かぶのは、ジャーナリズムの担い手としての報道機関だろう。ジャーナリストがいなければ、われわれは絶えず変化する世界の中で自分の位置を見定めることができない。

いま現実に進行しつつある事態についての情報を提供することによって、(3)われわれの生きる拠り所としての「事実」を伝えるのがジャーナリズムの役割であるが、情報を集めて多くの人々に提供するという仕事自体は「政治の世界」に深く関わってこざるをえない。

その理由は報道が政府による情報統制の一環に組み込まれていて、時の政権や特定の党派に加担しているからではない。政治という営み、公的な場で行われる「行為」の特質に関わっている。

「行為」が複数の人間の相互作用の網の目の中で行われるとすれば、その結果は各人の意図とは一致しない予測不能性をはらんでいる。とりわけ政治報道の場合、政治家の行為の意味を、その行為が行われている過程で判断するのはなかなか難しい。[D]政府の政策決定過程において、各省庁や諮問機関での準備作業をふまえて所轄大臣や首相が政策として決断して閣議決定するという場合に、報道機関が重視するのは、大臣や首相がその実行を決意した時点でその内容をいち早く報ずることだろう。閣議決定や記者会見の内容をたんになぞるだけでは遅い。他社に抜かれれば、後追いの記事になるし、速報性という意味でのニュースの価値は失われる。そうであるからこそ、報道各社の政治部の記者は首相をはじめとする主要閣僚や派閥の領袖、重要な官僚や委員会の審議員などに密着してその動向を絶えず探ることになる。何らかの情報を引きだそうとする彼らの努力は政治家や官僚の側の意図的なリークや、情報を与える見返りとしての供応などの腐敗の土壌を生み出すことになるだろう。これは、人間の「行為」がもたらす予測不能性に対応しようとする試みにともなうリスクである。

その意味においてジャーナリズムは、自らの取材と報道をつうじて、政治という営みの中に巻きこまれているのである。そうした中で可能な限り事実を確かめて、時々の政権や政策担当者、あるいはさまざまな党派の行動とその方向性を正確に報道することは、重要であると同時になかなかに困難な仕事である。そのためには個々のジャーナリストの努力だけでなく、政治の現場に密着しながらそれと一定の距離を保つことができるだけの組織やネットワークの形成が必要だろう。

インターネットや双方向の通信が情報の流通量や速度において既存のマス・メディアを凌駕し、誰でも好きなときに広く情報を発信することができるようになり、そのために必要な情報を取得するエ マグチも格段に広がっている。同時にそれは、虚偽も含めた情報の意図的なリークによる世論操作や政治的影響力の行使や、誹謗チュウショウなどの流布による個人や集団への攻撃などの可能性も広がることを意味する。(4)そうした状況の中で報道機関に果たすべき役割があるとすれば、正確な事実の確認のための手段を組織して、信頼できる情報を発信すること以外にないだろう。

報道機関の仕事は、政治的な活動とは区別されなければならない。たんなる「誤報」ではなく「虚偽」の報道は、報道に対する信頼を失墜させることによって、情報提供という本来の役割を阻害することになる。非政治的で中立的な機能を果たすことによってこそ、報道機関は政治にとって重要な寄与をなすことができる。(5)そうであるからこそ政治の側は、報道が中立的な情報提供という役割を十分に果たすことができるよう保護しなければならない。★アレントによれば、自由主義的なオ リッケン国家というのは、体制の安定的な機能のために、メディアなどの中立機関の保護を政治的に選択した体制のことであった。

（牧野雅彦『今を生きる思想　ハンナ・アレント　全体主義という悪夢』）

★ポリス……国家。都市国家。市民による政治体のこと。

★アレント……ハンナ・アレント（一九〇六～一九七五）。ドイツ出身のアメリカ合衆国の政治哲学者・思想家。本文は、ハンナ・アレントの思想をもとに執筆されている。

問一 ――(1)「事実を語る証人」とありますが、筆者はここで「ありのままの事実」を語ることの難しさを述べています。本文によれば「ありのままの事実」を語ることが難しいのはなぜですか。――(1)より前の記述をもとに、「ありのままの事実は、…が少ないから。」という記述文になるように、三行以内で説明しなさい。

問二 [　(2)　]に入れる表現として最もふさわしいものを、次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 事実はたしかではありません
イ 不都合な真実があるだけです
ウ それはあなたの意見でしょう
エ 意見など存在しないのですよ

問三 ――a「『事実の真理』」、――b「『政治』」とありますが、筆者はこの二つについて、どうする必要があると述べていますか。筆者の考えをわかりやすく三行以内で説明しなさい。文末は「…こと。」としなくてかまいません。

問四 ――(3)「われわれの生きる拠り所としての『事実』を伝えるのがジャーナリズムの役割である」とありますが、筆者によれば、「ジャーナリズムの役割」とはどういうところにありますか。その背景を文末を「…ところ。」という形にして三行以内で説明しなさい。

問五 ――(4)「そうした状況」とありますが、その説明として最もふさわしいものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 人びとが好きな情報を大量に流通させることができる一方で、世論を一定の方向へ導いてゆくことが困難になるという状況。
イ 情報の流通量や速度が従来のマス・メディアを超えてゆく一方で、必要な情報を取得しにくくなる可能性もあるという状況。
ウ 双方向の通信技術が発達してゆく一方で、世の出来事や政治に対して批判的な情報も広がっていくおそれもあるという状況。
エ 大量の情報が広範囲に流通する一方で、その中に意図的な操作や攻撃性のあるものも混在しているかもしれないという状況。

問六 ――(5)「そうであるからこそ政治の側は、報道が中立的な情報提供という役割を十分に果たすことができるよう保護しなければならない。」とありますが、このことに関連して国語の授業では、先生の説明があり、その後にAさん～Dさんの意見や感想が述べられました。本文の内容に沿った考え方をしている一人は、AさんからDさんのうちの誰ですか。ア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

先生　ここでは、報道機関と政治的活動とが明確に区別されていなければならないだけでなく、政治の側が報道機関に対し、中立的な情報提供を保護すべきことが述べられています。皆さんは、ここでの「中立」と「保護」についてどう考えますか。

ア Aさん　私は、ここでの「中立」とはどちらの政治的勢力にも偏らないことを意味しているので、政治の側は報道機関に対して一定のルールを設けて規制することが「保護」に当たると考えました。

イ Bさん　私は、ここでの「中立」とは報道機関が政治的影響下にないことを意味しているので、政治の側は報道機関に対して信用できる情報の発信を可能な形にすることが「保護」に当たると考えました。

ウ Cさん　私は、ここでの「中立」とはどの政治勢力に対しても公平に批判できる報道を意味しているので、政治の側から見て中立的だと判断した報道機関を守ることが「保護」に当たると考えました。

エ Dさん　私は、ここでの「中立」とは非政治的な機能を果たしている報道機関のことを意味しているので、政治の側は自らの政治勢力に寄与をなすようにすることが「保護」に当たると考えました。

問七 A ～ D に入れる語として最もふさわしいものを次の中から一つずつ選び、記号で答えなさい。（ただし記号はそれぞれ一回ずつ使用します。）

ア したがって　**イ** たとえば　**ウ** あるいは　**エ** しかも

問八 ――ア～オのカタカナを漢字に直しなさい。

問九 本文の内容に合うものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 「自由」「正義」「名誉」「勇気」といった人間の生きる原理原則や資質・特質を政治の場で語るとき、その真理性は敵意や反感の的になる場合が多いため、結局は誠実さの証明にしかならない。

イ 哲学が根本的なところで政治に対して批判的・懐疑的な立場をとり、常に「真理」を求めていたのは、古代ギリシア・アテナイの民主政が単に多数決による決定では通用しなかったことによる。

ウ 政治の場において「事実の真理性」が擁護されるべき理由は、政治の場では不都合な事実が否定されやすいからであり、その意味でジャーナリズムの担い手としての報道機関の役割は大きい。

エ インターネットによる情報は、流通量と速度において従来のマス・メディアを超えており、報道機関による意図的な「誤報」や「虚偽」の報道も含まれているので、私たちは注意すべきである。

2 **次の文章は、いとうみく『バンピー』の一節です。**
これまでの主なあらすじ を読んで、本文を読み、後の問いに答えなさい。

これまでの主なあらすじ

高校二年生の主人公高比良成は、三年前に母（衣里）を亡くしている。しかも父親（高比良悠之介）が「しばらく留守にします」と置き手紙を残し、いなくなってしまい、三人の妹（小学五年の環、四年の巴、一年の奏）の面倒を見る毎日を送ることになった。ある時、妹がスーパーで万引きをしたという店からの通報を受け、成は引き取りに店へ行くが、そこで出会った万引きの犯人は深沢蛍という十六歳の女子高生だった。蛍は悠之介を「パパ」と呼び、連絡の取れない悠之介に代わって成が身元引受人にさせられ、家に連れて帰ることになった。家のことは叔母の小春（悠之介の妹）が来ていろいろと世話をしてくれていたが、成、環、巴、奏、そして蛍も加わり、五人の面倒を見る当面の親代わりが必要ということで小春もしばらくこの家で暮らすことになる。小春は美容師で自分の店を持っている。蛍は高校を休学しており、小春に薦められて店の手伝いをするようになる。そして家族六人の生活に少しずつ慣れていった。蛍の母親である深沢頼子は、小春が美容学校を卒業してすぐに勤めた大手美容室で出会った同期の美容師で、閉店後によく二人で練習をしていた仲だった。

「ママは逃げたんだよ」
「逃げた？」
「ママはいつもそう。苦しいことからも都合の悪いことからもすぐに逃げる。きっとそのときだってそうだよ。妊娠して、なにか都合が悪くなって、全部切り捨てて逃げた。でも……パパはやさしいから。ダメなママを放っておけなかったんだと思う」
「蛍ちゃん、知ってたんだよね。高比良悠之介は父親じゃないって」
蛍はすっと視線をそらして、オレを見た。なにか物言いたげな瞳をしている。
「だますとか、そういうつもりはなかったんだけど、やっぱりだますことになってるよね……。でも、うそはついてない。あたしにとってパパは、やっぱりパパだから。ずっとそう呼んできたし」

そう言って、少しaバツが悪そうに蛍はこんな話を始めた。

蛍は小学三年生まで、川べりにある小さなアパートで母親と二人で暮らしていた。

母親は美容師で、アパートから数分のところにある古い美容室で働いていた。六〇代後半の夫婦が営むその美容室は、地元の客が大半だけれど、評判はよく、いつも客でにぎやかだった。

オーナー夫婦は、蛍のこともとてもかわいがってくれた。子どもを一人で留守番させるのはかわいそうだと、学校が終わったら店に来るよう言ってくれた。蛍は母親の仕事が終わるまで、店の隅のテーブルで宿題をしたり、絵を描いたり、お客さんと話をして過ごした。そのうち、店のタオルをたたんだり、掃除を手伝うようになった。すごいね、蛍ちゃん上手ね、大人たちにほめられるのがうれしくて、蛍は得意になって手伝いをした。

そこでの数年間の生活が、一番幸せだったと蛍は言った。

そんな生活が変わったのは、蛍が三年生の夏だった。奥さんのまさ子さんが体調を壊して入院した。蛍にはくわしいことはわからなかったけれど、退院後まもなく、店をたたむことになった。

頼子は腕の良さが買われて、都内にある大手美容室で働くことになった。それにともなって、アパートを越し、蛍は転校した。

新しい店は、川べりの美容室とはまったく違った。大きなビルの一階、二階に店があり、施術台が［A］並んでいた。きらきらした店内には、若い美容師が何人もいた。当然そんな店に子どもが入り浸るわけにはいかない。蛍は見知らぬ街で、見知らぬ学校に通い、放課後は六畳一間のアパートで一人、母親の帰りを待つ生活になった。

母親は夜一〇時過ぎに帰ってくると、そのまま風呂にも入らずに布団にもぐり込む。そんな毎日になった。

一年ほどたったある日、コンビニに行ってくると言って出かけた母親が万引きでつかまった。駅前にある本屋で雑誌を二冊盗んだ。

これが始まりだった。

そのとき母親の身元引受人になったのが、高比良悠之介だった。

悠之介は母親の昔からの友人で、蛍の名付け親でもあるおじさんだった。

おじさんは、蛍が幼いころから、年に数回おみやげをたくさん持ってあそびに来た。おじさんが来る日、母親はいつもより念入りに部屋を掃除し

て、いつもよりちょっとだけおしゃれをした。どこかうきうきとしている母親を見るのが蛍は好きだった。

「ママ、おじちゃんのこと好き？」と、まだ保育園のころ聞いたことがある。母親は蛍の問いに驚いた顔をして、「好きよ」と答えた。「結婚するの？」と言うと、「蛍がまさ子さんのことを好きなのと同じ好き。蛍はまさ子さんと結婚したい？」「ううん」「でしょ」。母親のことばが、(1)すとんと胸に落ちた。好きには、いろいろな好きがあるんだ。

本屋から電話がかかってきたとき、蛍はおじさんに電話をした。おじさんしか頼る人がいなかったのだ。

おじさんは大丈夫だからと蛍に言って数時間後、母親と一緒にアパートに帰って来た。泣きすぎて腫れた目をして、ごめんねごめんねと言う母親に、蛍はただ抱きつくことしかできなかった。

その後、母親は仕事を休みがちになり、三カ月後、二度目の万引きでつかまった。

「いま考えると、あれは二度目の万引きじゃなくて、捕まったのが二度目だったんだと思う」

蛍はそう言って、「そのころだったな」と表情がほんの少しやわらいだ。

「あのころ、おじさんは前より頻繁にアパートに来て、ママが仕事に行っている間に、二人で買いものに行って、カレーを作って。そんなときに、どうしてうちには、パパがいないんだろうって、あたし言っちゃったの」

幼いころから、母親がそのことについて触れたことはなかった。だから無意識のうちに、蛍もそれを口にできないでいたのだという。

「そんなこと、しょっちゅう考えていたわけじゃないよ。ただ運動会だったり父の日だったり、母親が不安定になったときとか、そんなときにね」

蛍はつぶやくように言って、小さく笑った。

(2)「だったら、おじさんのことをパパって思えばいいよ、ほら言ってごらんって」

そう蛍に言ったのだという。

「アニキらしいね」

小春ちゃんは苦笑した。

「ママはダメだって言ったけど、ぼくは蛍の名付け親なんだから、うそじゃないだろって。そんなに深刻に考えることないよってパパが」

そう言ったのだと蛍は言った。

「……ちょっと待った。なんで父さんが名付け親なわけ？　やっぱり父さんとなにか」

小春ちゃんは［ア］を振った。

「アニキが蛍ちゃん親子のことを気にしてたのは、蛍ちゃんのお父さんがアニキの親友だったから」

と、小春ちゃんはすっと目を伏せた。

父さんと蛍の父親が親友だった。

「事故で亡くなったの。蛍ちゃんが生まれる前に」

蛍の父親は、蛍が生まれる二カ月ほど前、雨の日にビルの階段から転落して亡くなった。憔悴している頼子さんを支えたのが父さんだったのだと小春ちゃんは言った。

「アニキもだけど、それ以上に衣里さんが頼子さんのことを心配したらしいよ」

「母さんが？」

「衣里さんも成を産んだばかりだったでしょ。自分と頼子さんとが重なったんじゃないかな」

小春ちゃんはきゅっと［イ］を噛んだ。

「わたしが頼子さんのことを知ったのは、蛍ちゃんのお宮参りのとき。蛍ちゃんを抱いた頼子さんと隣にいるアニキと神社で鉢合わせして。そのあとアニキを問い詰めてようやくね。名前のこともそのときに。頼子さんから、子どもの名前を付けてほしいって頼まれたんだって」

それで、蛍。親友の子どもであろうと、漢字一文字。

「父さん、ぶれないよな」

オレが(b)苦笑すると、小春ちゃんは蛍を見て目じりを下げた。

「蛍ちゃんのお父さんの名前は、ホトムラヒサシさん」

ホトムラ……。

「彼の両親が二人の結婚にすごく反対したらしくて」

二人を別れさせようと、乱暴なやり方をしてくるホトムラさんの親から逃れるために、二人はだれにも行先を言わず、駆け落ちのようにして東京を離れたのだという。その数カ月後にホトムラさんは事故で亡くなった。

「彼が亡くなったとき、まだ籍は入れていなかったの。でもそれが頼子さんにとっては幸いだったと思うよ。もし籍が入っていたら、生まれてきた

赤ちゃん、蛍ちゃんはあちらにとられてたと思う」
「三流ドラマみたい」
　B　言った蛍のことばに、不謹慎ながらオレは思わず笑ってしまった。
　ホトムラさん、か。本当なら蛍の名字はホトムラになってた……あっ。
「それでか」
　思わず声を出したオレを、充血した目で蛍が見た。
「小春ちゃん、ホトムラさんってこういう字なんじゃないの？」
　オレは宙で指を動かした。ほたるに、むら。

――　蛍　村　――

　小春ちゃんの表情がやわらかくなる。
「頼子さんから赤ちゃんの名付け親になってほしいって頼まれて、アニキは『蛍』はどうだろうって。生まれてくる子は蛍村の姓を名のることはないだろうけど、ちゃんと赤ん坊のなかに父親を残しておけるようにってね」
　蛍は　イ　を噛んだ。
「ばかみたい」
「そうか？　父さんにしては上出来だと思うけど」
　オレが言うと蛍はふるふると　ア　を振った。
「ばかなのはママ」
「蛍ちゃん……」
「結局、結婚に反対したやつらが正解だったってことだもん。ママと駆け落ちなんてしなかったら、パパは死んでなかったかもしれない」
　蛍の声が、苛立ちからか震えていた。
　こんなときなにを言えばいいんだろう。
　オレなら、オレだったら、下手になぐさめられたくない。わかった風なことを言われるくらいなら、だまっていてくれたほうが百倍マシだ。
「娘は母親に厳しいっていうけど本当だね」
　って小春ちゃん、いまそれは……。オレも人のことは言えないけど小春ちゃんも★たいがいだな。
「なんにも知らないくせに」
　声をとがらせた蛍に、小春ちゃんは「ごめん」と言って、ためらうようにまた口を開いた。
「でも、蛍ちゃんの知らない頼子さんもいるんだよ。わたしの知っている頼子さんは、魅力的な人だった。仕事も丁寧で人が面倒がるような仕事もいやな顔一つしないで。蛍ちゃんが仕事をする姿を見て、ああやっぱり親子だなって」
(3)「やめて！」
　視線をそらした蛍は、絞り出すように言った。
「ママが刑務所に入るって決まったとき、あたしほっとした。ああこれでもう心配しなくてすむ。期待して裏切られることもないんだって」
「なら、なんでしたんだよ。万引き」
　オレの口からこぼれた。ずっと気になってたけど、母親のことを聞いて、ますますわからなくなった。
　万引きは、蛍が一番苦しんで、一番憎んでいた行為のはずだ。なのにどうして。
「成って、やっぱり天然だよね」
(4)蛍の頬がわずかにゆるんだ。
「悪かったな」
　たしかにいま言うべきことではなかったかもしれないけど。でもいまだから、バカみたいに直球で言えたのかもしれない。
「なんで？」
　もう一度繰り返すと、蛍は耳たぶをこすった。
「知りたかったから」
「で、なにか、わかった？」
　オレの問いに、蛍は小さく首を横に振って笑った。

（いとうみく『バンピー』）

★たいがいだ……かなりの程度に達するさま。

問一　(一)　――a「バツが悪そうに」・――b「苦笑する」とありますが、それぞれの意味として最もふさわしいものを、一つずつ選び、記号で答えなさい。

a「バツが悪そうに」
ア　なんとなく恥ずかしそうに
イ　外から見た感じが悪そうに
ウ　しめくくりが付かなそうに
エ　傲慢な態度を改めるように

b「苦笑する」

ア　心の中で、人知れずこっそり笑う
イ　軽べつする気持ちで、相手を笑う
ウ　不満は残るが、よくやったと笑う
エ　不快に思いながら、仕方なく笑う

(二)

「笑い」に関する語句問題です。次の〈説明〉が完成するように、［Ⅰ］にひらがな三字、［Ⅱ］に漢字一字（ひらがなでもよい）、［Ⅲ］に漢字一字をそれぞれ入れなさい。

〈説明〉
「思い通りになって、うまくやったと、一人でこっそり笑うこと。」をあらわす言葉を「［Ⅰ］えむ」と言う。また、「いつもにこにこ暮らしている人の所には、ひとりでに幸せがやってくるものだ。」という意味のことわざを、「笑う［Ⅱ］には［Ⅲ］きたる」と言う。

問二　――(1)「すとんと胸に落ちた。」とありますが、「蛍」はどういうことが「すとんと胸に落ちた」のですか。文末は「…こと。」という形にして、三行以内で説明しなさい。

問三　――(2)「『だったら、おじさんのことをパパって思えばいいよ、ほら言ってごらんって』」とありますが、「悠之介」が「蛍」にそのように言うことができたのはなぜですか。三行以内で説明しなさい。

問四　――ア「［ア］を振った。」・――イ「［イ］を噛んだ。」とありますが、「［ア］を振った」は慣用句で、頭を左右に振って承知しないという気持ちをあらわす言葉です（128行目にも同じ表現が出てきます）。［ア］に入れるひらがな三字を書きなさい。また、「［イ］を噛んだ」も慣用句で、「悔しさをじっと我慢する。」という意味をあらわす言葉です（125行目にも同じ表現が出てきます）。［イ］に入れるひらがな四字を書きなさい。

問五　――(3)「『やめて！』」とありますが、このときの「蛍」の心情を、文末は「…という気持ち。」にして三行以内で説明しなさい。

問六　――(4)「蛍の頬がわずかにゆるんだ。」とありますが、その理由を説明したものとして最もふさわしいものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　自分は母の美容師としての立派な姿を理想にしており、小春の発言には少し説教臭さを感じているのに、成は周囲を気にしないで思うことを述べるのが、かえって微笑ましく思えたから。
イ　自分は母の苦労を幼いころから知っており、万引きの件では早く罪を償ってほしいと願っているので、今さら万引きの原因を聞く成の様子から、かえって安心感が得られると思えたから。
ウ　自分は母のことで複雑な思いを抱え、万引きしてしまう母の内面を少しでも理解したいと思っているが、成のほうはそのことに大して頓着していないことが、かえって滑稽に思えたから。
エ　自分は母が大変な暮らしの中を生きてきたことに思いを巡らすとともに、万引きは悪いと思っていたので、成が思ったとおりの言葉を発してくれたことで、かえって清々しく思えたから。

問七　［A］・［B］に入れる語としてふさわしいものを次の中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。（ただし記号はそれぞれ一回ずつ使用します。）

ア　ぼそりと　　イ　ぐっと　　ウ　じっと
エ　ぼうっと　　オ　ちゃんと　　カ　ずらっと

問八 国語の授業で、Aさん～Dさんの四人が本文を読んだ感想を述べ合いました。この中で本文を最も正しく読めている一人は誰ですか。次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア Aさん　私はホトムラさんと悠之介の厚い友情が気になりました。赤ちゃんの名付けを悠之介に託したことからも、ホトムラさんは悠之介をいかに信頼していたかが理解できます。

イ Bさん　私は蛍の心の複雑さに関心を持ちました。蛍と頼子さんを中心に本文前半から読み直すと、後半の厳しい蛍の言葉の裏に離れがたい親子関係を感じとることができます。

ウ Cさん　私は蛍のよき理解者としての小春ちゃんに興味を持ちました。小春ちゃんはホトムラさんと頼子さんが出会った時からよく事情を知っていたのだと推測できます。

エ Dさん　私は成の内面描写が本文に安定した語りの役割を与えていると感じました。成の思いが場面ごとに挿入されているのはそのためだろうと結論づけることができます。

問九 本文の内容に合うものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 蛍の母頼子は、美容師としての腕の良さが買われて都内にある大手美容室で働くことになったが、転校して見知らぬ街で見知らぬ学校に通う娘がかわいそうでならなかった。

イ 幼少期から母と二人だけで暮らしてきた蛍は、どうして自分には父親がいないのかを口にするのを、運動会や父の日や母が不安定なとき以外は禁じられていた。

ウ 「天然」と言われても思ったことを率直に言う成は、蛍がなぜ母頼子と同じように万引き事件を引き起こしてしまったのかを、自分なりに理解できたような気がした。

エ 小春は頼子が仕事も丁寧で魅力的な人間であることを蛍に伝えたが、蛍にとってはかえって余計な期待を背負うことになると、精神的な負担を感じることも多かった。